

熊本近代史研究会創立 50 周年記念事業収入支出決算書

(1) 収入の部

項目	予算 (円)	決算 (円)	備 考
自己負担金	560,000	560,000	
参加費	75,000	68,000	有料入場者 136 名× 500 円
書籍売上げ	525,000	522,000	174 冊× 3000 円
助成金	840,000	840,000	くまもと 21 ファンド、熊日文化スポーツ基金、熊本放送財団
合 計	2,000,000	1,990,000	

(2) 支出の部

項目	予算 (円)	決算 (円)	備 考
講師等謝礼	330,000	300,000	県外講師 100000 円 (旅費・宿泊費含む)、講師・司会 50000 円× 4
旅費・宿泊費	69,700	0	
会場借上げ費	50,000	25,350	ホール代 12000 円、付属設備代 13350 円
会場看板料	50,000	21,052	看板 15802 円、パネラー表示 5250 円
広報費	75,000	33,600	チラシ 8000 枚、33600 円
当日配布資料作成費	25,000	15,750	150 名分
書籍(記念論集)作成費	1,200,000	1,400,000	500 冊
記念資料作成費	30,000	52,500	『50 年の歩み』 100 冊作成
事務諸経費	148,300	119,974	通信費・切手 19900 円 ・書籍送料 36325 円 会議会場使用料 18940 円 チケット印刷費 15750 円 封筒・事務連絡等印刷費 18900 円 事務用品等雑費 10159 円
交通費	13,000	10,080	タクシー代 8 件 10080 円
会場受付役務費	9,000	9,000	3 名× 3000 円
合 計	2,000,000	1,987,306	

剰余 2694 円は、熊本近代史研究会の一般財政に組み込みたいと思います。

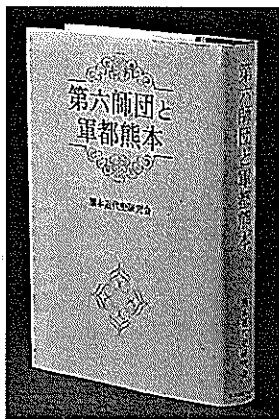
熊本近代史研究会 会長 小松 裕



# 軍と地域社会との関係 丹念に

熊本近代史研究会  
「第六師団と軍都熊本」出版

出版された論文集「第六師団と軍都熊本」



熊本近代史研究会（会長 小松裕熊本大教授）は、創立50周年を記念した論文集「第六師団と軍都熊本」（熊本出版文化会館）を出版した。これまであまり研究されてこなかった旧陸軍第六師団とその拠点都市だった軍都熊本に焦点を当て、第六師団の歴史的役割や地域社会との関係などについて会員らが解明に挑んでいる。

第六師団は、1888（明治21）年に編成された大本営本帝国陸軍の師団の一つ。熊本は1871年に鎮西鎮台の拠点が設置されて以来、熊本鎮台、第六師団の本営が置かれ、戦前から敗戦に至るまで75年間にわたって軍事拠点（軍都）であり続けた歴史を持つ。本書は①第六師団の歴史②第六師団と地域社会との関係の2部構成。会員12人が熊本の地域社会や経済、教育などさまざまな分野に影響を与えた第六師団について多角的に研究に取り組んだ論文を掲載している。

水野公寿さんは、鎮西鎮台の設置から第六師団時代に至る中で、熊本が「軍都」として成立する過程を資料や文献にあたって丁寧にまとめ、軍と地域社会との関係や地域経済への影響などについても言及。小松会長は「第六師団は、1928年の済南事件や南京事件について、これまで使われていない史料や兵士らの日記などを基に、第六師団の事件へのかかわりや事件の実態解明に取り組んでいる。菊池南朝史観の形成や愛国婦人会、軍事郵便の視点でまとめた論文や、従軍日誌、書簡などの資料や資料解説も掲載している。

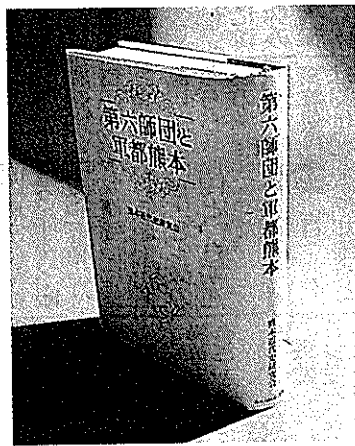
小松会長は「第六師団は、熊本の近代史において欠かせないテーマ。熊本の近代史が日本やアジアの歴史と密接に関わっていることを、第六師団の存在が表していると言っている。まだ一端を明らかにしたに過ぎず、今後も継続的な研究が求められる」と話している。4500円（税別）。

（浪床敬子）

歴史、行動、その特質...

## 「第六師団と軍都熊本」刊行

### 熊本近代史研究会 創立50周年を記念



を論文集にして刊行。特に、2009年の生誕200年に前後して発表した幕末熊本の思想家・横井小楠に関する諸研究は全国的にも注目を集めている。

創立50周年記念論文集には12の論文を収録。

第六師団の歴史と軍都熊本の形成過程を丹念に追った「軍都熊本の成立」（水野公寿氏）をはじめ▽1928年の第2次山東出兵の際に発生した「済南事件」を第六師団の行動を中心に分析した「済南事件と第六師団」（小松裕氏）▽これまであまり明らかにされてこなかった第六師団の南京事件への関わりを論じた「南京事件と第六師団」（廣島正氏）など第六師団の歴史・行動を追う論文を前半に掲載している。

昨年、創立50周年を迎えた熊本近代史研究会が、記念論文集『第六師団と軍都熊本』を刊行した。鎮西鎮台、熊本鎮台を母体に1888（明治21）年に編成された第六師団の歴史や行動を明らかにする一方、第六師団と地域社会や地域経済との関係など、これまで体系的な研究がなかった第六師団研究に新たな1ページを開き、同時に軍都熊本の特質や諸相も提示する1冊となっている。

熊本近代史研究会は、1960年の創設。毎月、熊本はもとより広くアジアを視野に近代を考察する研究会を開催し、会報を発行。現在、会員75人、会報は470号を超えている。また30周年、40周年など節目の年には、会員の研究

▽従軍看護婦の日誌から病院船が兵隊・武器の輸送にも当たっていた実態も明らかにした「日中戦争初期の病院船について」（江藤伸子氏）などの論文も収録している。

◇「第六師団と軍都熊本」は熊本出版文化会館刊、4725円。

西日本新聞

2011, 5, 24

# 「第六師団」の歴史探る

熊本近代史研究会  
創立50周年シンポ

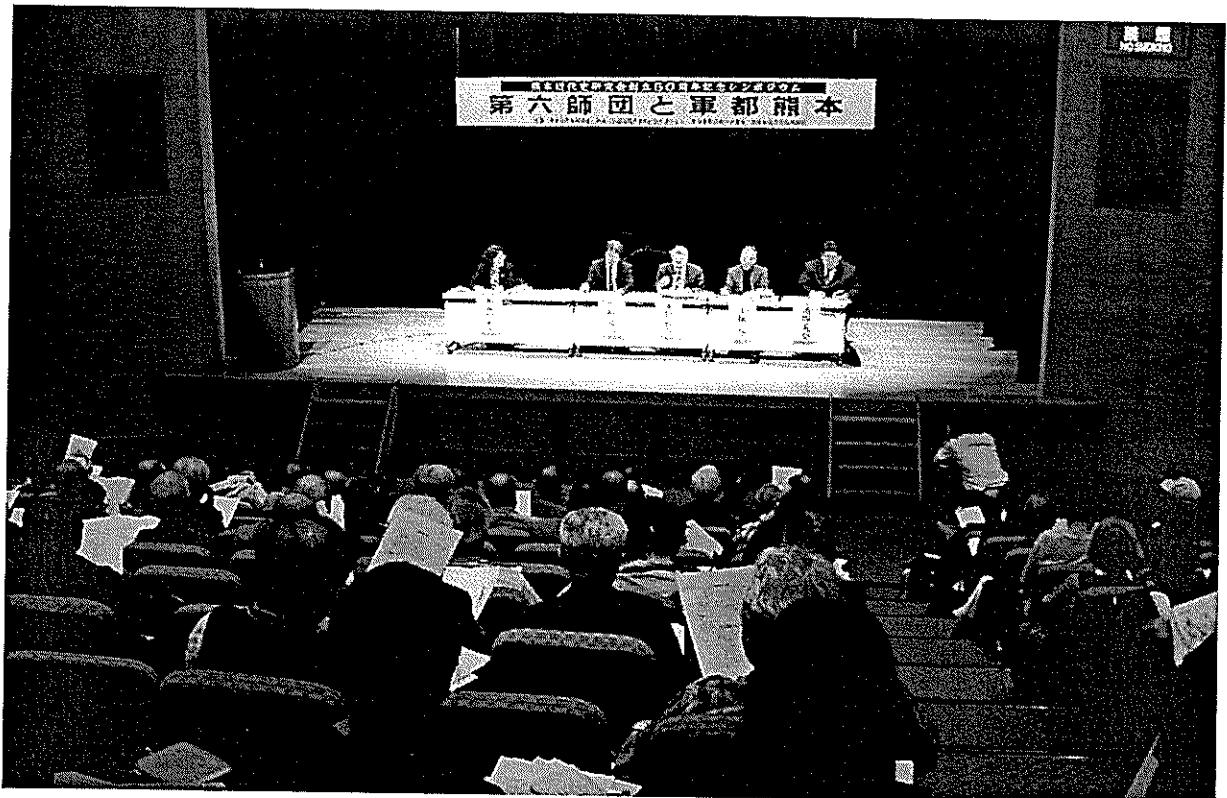
熊本近代史研究会（会長・小松裕  
熊本大文学部教授）創立50周年記念  
シンポジウム「第六師団と軍都熊本」  
が5日、熊本市の市国際交流会館ホ  
ールで開かれ、約150人が参加し  
た。

静岡大情報学部 荒川章二教授が「第六師団の歴史と地域社会」と題して講演。「山崎練兵場など都市の中核に軍事施設があり、都市計画上、市当局にとっては大きな問題だったことする一方、中央にあったことで、軍と市民の一体感がつくられたのかもしれない」と述べた。また、満州事変時の戦争支持世論の形成について、「静岡では盛り上がりすぎた」と指摘し、村レベルから仕掛けられたが、熊本は将校や県の教育官僚らによって上から急につくられた」と指摘した。

同研究会は来年3月をめどに第六師団研究の書籍化を目指しており、会員3人が成果を報告。小松会長は「朝鮮の抗日義兵闘争の弾圧において、日本から派遣された第六師団が現地の駐留軍とともに中心を担い、韓国併合への道ならしをした」などと説明した。

（内海正樹）

「熊本日日新聞」2010.11.8



「第六師団と軍都熊本」シンポを開催—多数の市民が参加 11月5日、熊本近代史研究会創立50周年記念シンポジウム「第六師団と軍都熊本」が国際交流会館ホールで開かれ、約150人の市民が参加した。静岡大学の荒川章二教授が講演の後、長谷川栄子氏の司会の下、小松裕・水野公寿・浦田大奨の各氏が成果を報告、研究書籍刊行への一歩を記した。